# 令和５年度　いのちの授業　事例集（幼稚園こども園）【環境】

掲載数 49

| | 地区 | 学年 | 教科等 | テーマ | 内　容 | 参考事項（講師・教材等） |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 横須賀市 | 幼複合 | 環境 | 生命尊重 | 園児が水槽の中のメダカの卵を見ていたところ、「卵の中で何か動いている」という声が聞かれる。そこで、小学校から解剖顕微鏡を借りてきて卵を観察したところ、「卵がクルッと回った」「中で何かドキドキしている」という驚きの声が上がる。その後も、日に日に変化していくメダカの卵に関心を示すとともに、園の田んぼの中にいるミジンコなどの微生物を積極的に観察する姿が見られた。<br>こうした活動を通して、小さな生き物の命の不思議さに感動し、動物や植物の命を大切にする気持ちが少しずつ芽生えてきた。 | |
| 2 | 相模原市 | 年中 | 環境 | なすの栽培を通して | クラスで植えたなすの葉に、たくさんのアブラムシ。なすの生育によくないことが分かっていた。アブラムシも命、どうしたらよいかみんなで考え、「引っ越してもらう」というアイデアが出た。そっと葉っぱに逃がして「ごめんね、おひっこししてね」と、優しく声をかけ見送った。また、大雨が降り風で苗が揺れていると、なすは大丈夫なのかと見守り「がんばれ～」と声援。なすの赤ちゃんは白くて、次第になす色になって行くという気付きもあり、世話と観察を行った。なす嫌いな園児も「このなすなら食べられる」との声も聞かれた。自然で生きる植物の命の力強さを通して命をいただく尊さも体感した活動となった。 | |
| 3 | 相模原市 | 年中 | 環境 | カタツムリの飼育 | 登園する時に見つけてきたカタツムリをクラスで飼うことになり、春から図鑑で調べたりエサをあげたりみんなでかわいがる姿があった。カタツムリの動きをじっくり観察する日が続いたある日、動かないことに気付いた。エサも全然食べないことがら元気がないと気付いた様子。「のどが渇いたんだ」「濡れたところが好きだものね」と話しながら水をあげる姿があった。生きるためには食べ物と水分が必要なことを経験から自然と気付くことができていた。また、『うんち』の絵本で食べたらうんちをすることを知り、また、カタツムリがうんちをするのを目の当たりにしたことも、人間だけではなく生き物にとっても欠かせない営みであることも学んでいたと感じた。 | |
| 4 | 県央 | 幼複合 | 環境 | チューリップの球根植え（栽培） | チューリップの球根を一人１ヶずつ、クラスのプランターに植える。<br>今年度は、小学１年生の担任の先生にご指導いただき、１年生のお兄さんお姉さん達に手伝ってもらいながら球根を植えた。<br>春になって様々な色の花を咲かせてくれる日を楽しみに水やりなどを行い、成長を楽しみにしている。 | |

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 5 | 県央 | 幼複合 | 環境 | 「夢ある未来プロジェクト」花の植栽 | 厚木市農協の企画「夢ある未来プロジェクト」として地域の運営委員さんを通して花の苗を提供いただいた。<br>園児と教師で園庭にある花壇を整備し、相談しながらビオラやパンジーなど、色とりどりの花の苗を花壇へと植えた。水やりをしたり、花びらをとって花氷にしたり、花を身近に感じながら過ごす機会となった。<br>植物へのいたわり、いのちの大切さについても伝えながら、楽しみながら花のお世話をしている。 | |
| 6 | 中 | 年中 | 環境 | 生き物の命を考える | クラスで飼っていたザリガニが脱皮に失敗して死んでしまった。数人の子ども達と一緒に木の根元に埋めている際、子ども達が「どうして死んでしまったのか」「死んだらどうなるのか」と話していたので、脱皮のことや命の大切さを話した。「残ったザリガニを大切にしないと」と話す幼児がいた。　翌日、捕まえた蝶２匹のうち１匹が死んだ。２人の幼児が、昨日のように木の根元に埋め、花を置いていた。もう一匹は逃がすかしばらく悩んでいたが、降園前に逃がしていた。「生きているうちに逃がせてよかった」と笑顔でつぶやいていた。 | |
| 7 | 中 | 年長 | 環境 | ザリガニの脱皮 | 園で飼っていたザリガニが脱皮途中でぐったりとしているのを見た子らが「身体が切れて死んじゃう」と大騒ぎとなった。担任は直ぐに答えを言わずに図鑑を数冊渡すと、どうしたらいいのか協力して探す子どもたち。脱いだ殻を見つけて脱皮したことに気づき、「大きくなったんだね」と、安心した。ただ、ぐったりしているのが心配で、前を通る度に、様子を伺っている姿もあった。翌日、世話をしている教諭が来ると、嬉しそうに「ザリガニが大きくなったんだよ。」と抜け殻を見せくれた。「見守ってくれて、ありがとう」と伝えると嬉しそうにした。脱皮という自然の現象を通じて、また子供たち同士で調べる機会を通じて、よりザリガニへの興味や愛着が増した。 | |
| 8 | 中 | 年少 | 環境 | 「スズムシの飼育を通して」 | 昨年の年長から引き継いだスズムシの卵を教師と一緒に観察し、大切に世話をしていた。５月に卵から孵化し、幼虫がたくさん生まれた。スズムシの絵本を環境として用意すると、子どもたちはすぐに興味を示し、絵本を参考にしながら、教師と一緒に世話をした。毎日世話をする中で、エサを食べてなくなっていることや日々成虫になっていくことにも気がつき、家からキュウリをもってきて自分からスズムシの世話をしようとするようになった。世話していくことで成長していく様子が励みとなり、友達同士で飼育ケースを広げて、古いエサをを取り除き、新しいエサに変えたり、霧吹きで土を湿らせたりするようになっていった。スズムシがエサに跳びつく姿を見て喜んで観察していた。秋になり、スズムシは寿命を迎えたが、土の中や側面に卵があることに気づき、スズムシの絵本を読み返す中で、命が次の代へと引き継がれていくことに触れる経験となった。 | |

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 9 | 中 | 年長 | 環境 | 「カイコの飼育を通して」 | クラスでカイコを卵から育てた。カイコの絵本や図鑑を子ども達が手に取りやすいように準備したことで、エサや飼育方法、体の構造等について、自分たちで図鑑を用いて調べる姿があった。<br>毎日の観察で、日に日に大きくなって脱皮をしていく様子に関心をもち、観察レンズを使って更に注意深く見ようとしていた。絵本と比べたり、気づいたことを友達と伝え合ったりすることで、よりカイコへの関心が高まり、進んで世話をする子も増え、カイコに愛着をもつようになっていった。カイコが糸をはき出すことで、体の色が変化していることに気づき、繭ができるまでの様子にも興味が広がった。今まで虫が苦手で触れることに躊躇していた幼児も、自分から触れて世話をするなど可愛がり、成長を楽しみにする姿が見られた。カイコの飼育を通して、生き物の成長の不思議さを知ったり、生き物に対して愛着をもってかかわったり、育てていく喜びを味わうことにつながった。 | |
| 10 | 中 | 年長 | 環境 | 生命の誕生と育ち | ・5月に飼育を始めた蚕は、卵から出る瞬間をみんなで観察をし、そこから個々が大事に世話をしてきた。6月中旬にまゆ作りを始めたので、全員で蚕をもう一度じっくりと観察し、絵で表していった。<br>・世話を続ける中で観察を重ねてきたこともあり、足の数を数えながら描いたり、呼吸をするための穴に気づいたりできる幼児が多かった。そのため、足の種類（吸盤の部分）が異なるのは何のためか、呼吸の穴が横についているのはなぜかなどを、子ども達と考えていった。幼児なりに考えたことを出し合い、蚕が生きていくために必要な形状や配置になっているのではないかという結論に達することができた。 | |
| 11 | 中 | 年中 | 環境 | 命の大切さ | 園外保育で見つけたカマキリをクラスで飼育することになった。どんな餌を食べるのか興味をもっている子も多く、図鑑等を用いて調べるとエサの虫探しが始まった。園庭でバッタや蝶を捕まえてカマキリに与えるとすぐに食べ、「手を使って食べるんだね。」「ちょっとずつ食べてるね。」とじっくり観察しながら感じたことを教師や友達に伝える姿があった。園庭であまり虫が見つからなくなると、「野原へ行って虫を捕まえてこよう！」と子ども達のアイデアで園近くの野原へ虫を取りに行くことが決まった。カマキリにエサをあげるためにはどうすればよいのか子どもなりに考える様子から、命を大切にしようとする気持ちが感じられた。育てたカマキリはその後産卵をし、卵も様子を気にしながら大切にしている。 | |
| 12 | 中 | 年少 | 環境 | 生き物との接し方について考える | 園の近くに野原に虫探しに行き、バッタを捕まえる。「園に連れて帰ってもっと見ていたい」をいう思いから虫かごに入れ園に持ち帰る。翌日、朝登園してきた子が、元気がないバッタを見つける。「ここが嫌なんじゃないかな。野原ではあんなに元気だったのに。」と昨日の様子と比べて変わってしまった様子について生き物の気持ちになり考えて図鑑で調べたり、野原と飼育ケースの違いに気づいたりして見る。「みんなでバッタさんのお家（野原）に返しに行こう」と野原に戻しにいくことにする。それ以降は、捕まえた虫は、観察したら逃げすようになった。生き物にも自分達と同じように大切な命が宿っていること、住みやすい場所や餌があること等を感じる経験になった。 | |

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 13 | 中 | 年長 | 環境 | ウサギの病気から世話をする責任を感じる | ある日、園で飼育しているウサギの首が曲がり、バランスがとれず壁にもたれかかっている。飼育当番を担当していた年長児が気付く。動物病院に連れていくと感染症による斜頸が疑われたため、ゲージに入れ室内で様子を見ることにした。「首が曲がっていてご飯が食べにくそうだね」等心配して毎日ゲージを見に来ては、ウサギに話しかけている。<br>始めは傾斜も酷く辛そうな様子だったが、薬の効果もあり、日に日によくなっていく様子に「今日は首が少ししか曲がってないよ」「毛もふわふわだよ」等細かい部分まで観察し嬉しそうに話していた。<br>１か月後、元気になったウサギを飼育小屋に戻す。その後、飼育当番では「首は曲がっていないよ」「餌はきれいに食べているよ」等細かくウサギの様子を観察し、職員室に報告にいくようになった。また、「今日はおやつを食べないんだ」「目の横が赤い」等体調の変化にも素早く気づくようになり、ウサギを世話する責任や愛情がより深まる機会となった。 | |
| 14 | 中 | 年長 | 環境 | 生き物の気持ちになって | １学期より生き物への興味関心を深め、命の大切さに気が付いてほしいと思い、金魚や川魚、ウーパールーパーなどをクラスで飼育している。夏休み中（８月）に金魚が病気にかかり、２学期が始まっても職員室で別の水槽に入れて薬浴をしていた。心配していた幼児に、金魚が病気になってしまったことや、そのために薬を与えていることを伝えると安心し、その後は、他の水槽の生き物を毎日のように観察して、変化があると教師や友達に伝える姿が見られるようになってきた。また、魚の名前を知るために、種類を調べたり、水槽が汚れていると「お家が汚れていると嫌だよね」と生き物の気持ちに共感したり、掃除の仕方を教師に尋ねたりしていた。その後、自分から餌をやったり、掃除をしたいことを教師に伝え、水槽の掃除の手伝いをしたり水をバケツ一杯にくんできたりする姿が見られるようになった。 | ・しいくかんさつ図鑑（監修　高家博成、今泉忠明、武田正倫） |
| 15 | 中 | 幼複合 | 環境 | 自然観察を通して、生き物の生態系を守ることの大切さを知る。 | 講師の方を招き「親子生き物の里調査隊」として、地域の生き物の里にはどんな生き物がいるか、網を使って捕まえる体験活動を行った。親子でドジョウやヤゴ、ザリガニなどを捕まえた時には、親子共に興味深々で見合っていた。また、捕まえた生き物を種類別の入れ物の分けていき、講師の方から捕まえた生き物の特徴を聞くことや、外来種のザリガニは生き物の生態系を守るために戻さないことを教えて頂いた。この体験を通して、それぞれの生き物の命を守る方法を知り、地域の身近な自然環境を大切に思う気持ちにつながった。 | NPO法人丹沢自然学校所属 |
| 16 | 中 | 幼複合 | 環境 | カナヘビの飼育を通して、生き物の生態に興味を持ち、命の大切さを知る。 | ５月下旬に園庭でカナヘビを見つけたことがきっかけとなり、カナアヘビ探しから飼育が始まる。本園は小学校と一体化であるため、カナヘビの生態に詳しい小学生からアドバイスをもらったり、中休みに一緒に探してもらったりしながら、カナヘビを探し続けたが、捕まえることができず、最終的に小学生が捕まえたカナヘビを園で飼育をすることになった。飼育の方法として『餌はバッタを食べる、飼育ケースの土が乾かないように霧吹きで水をかける、日差しが届くところに飼育ケースを置くなど』を教えてもらった。飼育のポイントを幼児なりに理解して工夫する姿が見られた。小さな生き物の命を慈しみ、大切に育てる心が育まれた。 | |

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 17 | 中 | 年長 | 環境 | 虫取り | 以前からダンゴムシやバッタなどの虫取りを楽しんでいたが、１学期までは捕まえては死なせてしまうことが多かった。２学期頃から捕まえると虫かごに入れて観察はするが、遊びが終わると「死んじゃうから逃がす」「お父さんとお母さんと会えなくてかわいそう」と虫の命や家族のことを考える姿が見られた。そして、見つけた場所や、バッタは草むら、ダンゴムシは植木鉢の下など餌がある場所に放す姿が見られるようになった。 | |
| 18 | 中 | 幼複合 | 環境 | アゲハ蝶の旅立ち | 育てていたアゲハ蝶の幼虫がサナギから蝶になる。「すぐご飯が食べられるようにお花の近くがいいんじゃない？」とプランターの近くに飼育ケースを移動させるなど、蝶が過ごしやすい環境を考える姿が見られた。なかなか動かない蝶を見て、「手をお花の形にしてみようよ」と手を花の形にしてみたり、花びらを近くに置いたりしながら飛び立つまでみんなで２０分近く見守る。差し出した花びらに蝶が乗ると「もう少し！頑張れ！」と声をかけたり、飛び立った蝶を目で追いながら「またね」「元気でね」と蝶の飛び立つ姿を喜んだりする姿が見られた。 | |
| 19 | 中 | 年少 | 環境 | 金魚の飼育 | ３歳児クラスに進級し、保育室の水槽にいる金魚に興味を示していた。登園すると「今日はもうご飯食べてる？」と担任に確認したり、給食時になると「金魚もお腹すいたかな？」と話したりする姿があり、保育教諭が餌をあげると金魚が口を開け、餌を食べる様子を楽しそうに見ていた。毎日観察する中で、水槽の水がきれいなときと少し汚れているときがあることに気付く子がいた。子どもから「金魚のお水が汚れてきてるよ。」と伝えてきたので、子どもの前で水槽の水を換えた。小さな水槽だったため、水槽ごとテラスの水道へ運んで洗い始めると、流した水や水槽を見て「汚れてる。」と驚いた様子だった。また、換えた水を陽に当ててから金魚を戻すと、そのことに気付き、「何ですぐに入れないの？」と聞いてくる子がいた。「陽を当てると金魚が入れる水になる。」と伝えると、不思議そうに聞いていた。それ以降、水の汚れも気にするようになり、「そろそろお水換える？」と言うようになった。金魚を飼育するためには、餌だけでなく、水もきれいにすることが必要だと知ることができた。 | |
| 20 | 中 | 年中 | 環境 | アゲハの幼虫を育てる経験を通して | 幼虫を見つけた４歳児に、年長児が「僕が育てようか」と提案すると「お部屋で育てたい」と答えた。年長児は思いを受け入れ「これアゲハの幼虫だよ。育てたことがある」と、１学期にクラスで飼育した経験を話す。他の年長児が「蓋は閉めた方がいいよ。開けてたらピアノの所に逃げたの」と親切に教えてくれた。その後、蓋が閉まるよう年長児と一緒に夏ミカンの枝を折っていた。後日、高い所に登り動かなくなった幼虫を心配して見ていると年長児が来て「もうすぐさなぎになるよ」と話す。安心した表情で４歳児は飼育ケースを眺めた。年長児の生き物への愛情や大切に思う気持ちが４歳児にも伝わり、大切に育てようとする気持ちが芽生え、深まった。 | |

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 21 | 中 | 年長 | 環境 | カナヘビの飼育 | 年少時より継続して飼育していたカナヘビを、みんなで「れんちゃん」と名付け、親しみを持って世話をしていた。飼育当番になると、ミールワームをカナヘビにやり、カナヘビが食べると「みて！食べたよ！」と嬉しそうに友達や保育教諭に知らせた。夏になり、ぐったりしている様子に気づいた子どもたちは「元気がないね」と心配したり、どうしたら元気になるかを考えたりした。「乾いているところがダメなんだよね」と霧吹きで水をかけたり、ミールワームをやったりし、工夫したり試行錯誤したりしながら世話を続けたが、”れんちゃん”は亡くなってしまった。その後、他の生き物を飼育する際にも、命を大切にしようとすすんで世話をする姿が見られた。飼育を通して生き物の生態に興味をもつきっかけにつながったと共に、生き物に愛着をもち、身近なこととして命を考えるきっかけになった。 | |
| 22 | 中 | 年少 | 環境 | チューリップの育成 | 朝顔やマリーゴールドを種から育て、植物を育てることに親しんできた経験を通し、次にチューリップを育てることになった。種とは違う球根の不思議さを感じながら興味をもって植えていた。球根の段階から愛着を持ち、チューリップに名前を付ける幼児もいた。しばらく水やりをしていたが中々育たないことを心配していた。次第に興味が薄れ水やりを忘れる幼児もいた。しばらくすると毎日欠かさずに水やりを続けていた幼児のチューリップの芽が出始め、クラスで話題にしたことで“毎日世話をすることの大切さ”について気づき、意識できるようになった。世話の大切さを感じた幼児たちは毎日水をやるようになり、「お水をあげないと枯れちゃうね」と言っていた。その後「僕のチューリップ芽が出た」「私のも！」と芽が出たことを喜び、育ちを感じながら愛情をもって毎日世話を続けている。 | |
| 23 | 中 | 年長 | 環境 | 大切に育ててきた生き物から学んだこと | ウーパールーパーを飼い、当番が毎日に世話をしていた。ある日、ウーパールーパーの餌の食べが悪く元気がないことに気付き、どうしたらよいかクラス内で話題になった。翌日、A児が、家で母と一緒に図鑑やインターネットを使って調べてきて、ウーパールーパーの適水温は10～20℃、気温は25℃以下であることが望ましいと皆に知らせ、酷暑が続いていることが原因であることが分かった。急いで、水温を下げたり、涼しい場所に移して世話を続けたが、死んでしまった。子ども達は、愛情を注いで世話をしてきた生き物が死んでしまいショックを受けていたが、この経験により「命はいつか終わってしまうから、1日1日を大事にしよう」ということや生き物それぞれに適した環境があることや世話の方法が違うことを学んだ。 | 担任 |
| 24 | 中 | 年少 | 環境 | 小さな命を大切に | テラスでの食事を終え、保育者がテーブルの片付けをしていた。自分達の食べこぼしたものをアリが運んでいることに気付き、保育者や近くの園児に伝えていた。「自分よりも大きい食べ物を運んでいる。」「お家まで運べるかな？」と話していると、保育室の中から急いでアリを見に来た園児がいた。「待って！止まって!アリがご飯を運んでいるから踏まないで！」と伝えていた。「このままだとアリが危ない。踏まれないように守ろう。」と近くにあった三角コーンを持ってきた。「足りない。先生もっと持ってきて。」と保育者が持ってきたものを並べていた。巣まで餌を運ぶ様子を見て「よかったね。やったー！」と友達同士で喜んでいた。友達と話し合い、小さい生き物にも命があり、大切に守ってあげるという姿が見られた。 | |

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 25 | 中 | 年中 | 環境 | バッタを捕まえたあと…どうする？ | 虫とりが大好きな年中組。ある日、園庭でバッタを捕まえたA児がいた。欲しいと話すB児にバッタが入った飼育ケースを渡した。B児は「バッタは葉っぱが好きだから入れてあげよう」と世話をしていた。片付けの時間になり、園庭に飼育ケースが残されていた。A児とB児に「捕まえたまま、園庭に置いたままだとどうなるかな？」と問いかけ、話し合いをした。「死んじゃう…」と返答があり、「逃がしてあげよう」「いや、家に持ち帰ってから逃がす」と意見が分かれた。結果的に、園で逃がすことになった。バッタなどの虫にも命があり、みんなと同じく生きていること、捕まえた後の関わりについて考えるきっかけとなった。 | |
| 26 | 県西 | 年長 | 環境 | 幼虫の世話 | 秋頃、カブトムシの幼虫を職員が持ってきた。『何がいるでしょうか？』と掲示し、飼育ケースを置いておくと、覗き込む子はいたが、何も見えずに「なんだ？」で終わってしまう幼児が多かった。その中で「先生、中を見てもいいですか？」という幼児がいたので、「いいよ、一緒に見よう！」と土を掘ってみる。そうすると白い大きな幼虫が出て来てとてもびっくりしていたが、中にちゃんといたことが分かると安心したようだった。<br>教師が幼虫のウンチをとって新しい土を入れる作業をしていると、「一緒にやりたい」と手伝ってくれる。その時だけの幼児が多い中で、毎日「先生、今日もウンチ取りします！」と自ら行動し、「今日はウンチ少なかったよ」「明日新しい土を足そうね」と加減がわかるようになった。「頼むね」「ありがとう」が自発的な行動を促すのだと感じた。 | |
| 27 | 県西 | 幼複合 | 環境 | ツマグロヒョウモンの飼育を通して | 園庭には様々な花が咲いている。子どもたちは、その花を使って色水遊びを楽しんでいた。花を摘もうとビオラのプランターに来た子が、幼虫を発見した。黒くてトゲトゲがあって、オレンジ色のラインが入っている幼虫を見て、「毛虫だ！」と大騒ぎ。そこで教師と一緒に図鑑で調べてみると「ツマグロヒョウモン」という蝶だとわかり、両クラスで飼育することにした。登園すると毎日熱心に観察し、「フンがいっぱい落ちてる！」「エサがなくなりそう！」「お尻から何か出してる！」と、その変化に興味津々だった。やがて、幼虫は蛹になり羽化の時がきた。幸運にも、羽化の瞬間を観察することができ、”いのち”の尊さを子どもなりに感じていた。 | 年少・年長 |
| 28 | 県西 | 幼複合 | 環境 | いのちの大切さ | 秋になり、いろいろな虫を目にするようになったことで、毎日のように虫取りを楽しんでいた。ある日、一人の幼児がカエルを捕まえ嬉しそうにしていた。他の幼児も興味津々だった。しかし、捕まえたことで満足してしまい、そのまま戸外に置き忘れてしまった。幼児が気付き見に行ったときには、カエルは動かなくなっていた。クラスで話し合いの場を設けると「食べ物がなかったから」「水がなかったから」と、振り返って原因を考えていく。「水をあげれば動くんじゃない？」と提案する幼児もいたが、何をしても、あの可愛いらしいカエルには戻らなかった。子どもたちにとって悲しい出来事となってしまったが、命の大切さ、尊さ、儚さなど、実体験を通して学ぶ様子が見られた。 | |

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 29 | 県西 | 年長 | 環境 | カタツムリの飼育活動から | 幼稚園の隣りの田んぼからカエルの鳴き声が聞こえてくると園庭にもカエルの赤ちゃんが遊びに来る。他にも芝生の園庭には多くの生き物たちが遊びに来る。今年もこの時期ならではのカタツムリが遊びに来ていた。それを発見した。<br>Ｎえは、担任にカタツムリを園で飼育したいと言ってきた。担任がクラス全員に尋ねると全員が賛成してくれ、カタツムリ飼育が始まった。Ｎえは「カタツムリが喜ぶと思うからケースの中に紫陽花の花を入れてあげたい！」と提案してきた。園長はＮえと一緒に紫陽花を選び、飼育ケースに入れてあげると「カタツムリさん喜んでいるね！」と顔を見合わせて微笑んだ。その後、Ｎえは友達のＭゆと一緒に毎日熱心に世話をした。 | |
| 30 | 県西 | 年少 | 環境 | カメの世話 | カメが餌をたくさん食べているときは、水に汚れがひどく、毎日掃除をして水も換えていたが、冬に近付くにつれ餌を食べる量が減り、水の汚れも目だたくなってきた。水の交換を3日に一回にしてみると、カメの足のところが白くなってきたので、病院で見てもらうことにした。結果、感染症とのことで、塗り薬が処方され、職員が塗ることにした。子どもたちと話し合いを行うと、「カメさんが病気になったらかわいそうだよ。」「水は毎日換えてあげる。」など、声が上がったので、掃除を毎日するように戻し、甲羅干しをするために散歩をさせたりしている。 | |
| 31 | 県西 | 年中 | 環境 | 捕まえた嬉しさとチョウを思いやる気持ち | Ａが園庭で黒色の蝶を見つけた。蝶が花にとまった瞬間、羽の部分を手で持って捕まえた。「先生、蝶を捕まえることができたよ！」と嬉しそうに教師のところにきて「この蝶をカゴに入れてお部屋で見たい。」と言ってきた。蝶は手で持った部分が切れてしまっていて、飛びづらそうだった。それを見た友達が「羽が切れちゃってるね。」「かわいそう。」と言った。教師は「Ａさんは捕まえて嬉しかったんだね。でも羽が切れて飛びづらそう。このまま虫かごに入れちゃうと飛べるかな？」と伝えると、「う～ん、飛べなくなっちゃうから虫かごに入れるのはやめる！」とＡが言った。捕まえて嬉しい気持ちはあったが、蝶の命のことを考えるＡ。生き物を大切にする心の育ちにつながった。 | |
| 32 | 県西 | 年長 | 環境 | カメのリボンくんのお世話 | 進級当初から、毎日張り切ってカメのリボンくんの世話をしている。「爪がちょっと怖いんだよ。」と世話をする時に、怖がる様子も見られていた。毎日のように観察しながら世話をしているので、だんだんと愛着がわき、「リボンくん持てるようになったよ。」と触れられるようになった。次第に季節は移り変わり、秋や冬になるとリボンくんの動きがにぶくなり、えさも食べなくなった。「どうしてだろう？」「寒いのかな？」「きっと冬眠するんだよ！」と昨年度にも冬眠したことを思い出す。みんなで冬眠する準備をし、「また会おうね。」とあたたかい言葉をかける場面が見られた。 | |

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 33 | 県西 | 年長 | 環境 | 生き物の飼育を通して<br>「命の不思議さや尊さを感じる」 | 保育室で飼育観察していたモンシロチョウのアオムシが、11月には保育室の天井や出入り口の網戸でサナギになっていた。幼児たちは羽化を心待ちにしていた。ある日、「サナギがチョウチョになっている！」とA児が言い、見てみると網戸のサナギの羽化が始まっていた。学級全員で喜びそこから数日見守っていたが、羽を広げるためには狭い場所だったのか、羽化はうまくいかずチョウは死んでしまった。教師がそのことを伝えると、幼児たちは真剣に聞き、「野菜畑にお墓を作ってあげよう」という意見が出た。「どうして野菜畑なの？」と聞くと、「（アオムシが）、生まれた場所だから」「野菜の葉っぱを食べて大きくなったから」「天国でも美味しい野菜を食べられるように」と言っていた。その後、学級全員で野菜畑にお墓を作った。幼児たちは「天国に行ってね」「また会おうね」「ありがとう」と死んでしまったチョウに声をかけていた。 | |
| 34 | 県西 | 年少 | 環境 | 見た目で判断せずに、命を大切に思い誕生を喜ぶ心 | 毎日水やりをして世話をしていたビオラの花が終わりを迎えた頃、見慣れない幼虫を何匹か発見した。赤と黒の一見不思議な幼虫だったが、育てることにして、ビオラの花と一緒に（この幼虫の食料だと知り）観察ケースに入れて成長を見守った。担任と一緒にこの幼虫が何になるのかを調べると、『ツマグロヒョウモン』という蝶になることがわかった。しばらくすると、幼虫はさなぎに変身し、なんとそのさなぎには綺麗な銀色の線が入っていた。「わあ！きれい」「ピカピカしてる」とみんなで感動した。そしてある朝、登園してきた子どもが「みてみて！ちょうちょになってる！」「わあほんと！」その蝶はヒョウ柄の美しい蝶となり、年長にも知らせてみんなで誕生を祝い、空へと飛び立っていく姿を見送った。 | |
| 35 | 県西 | 年長 | 環境 | 小さくても<br>大切ないのち | ダンゴムシやアリ、テントウムシなどを園庭で捕まえることを楽しんでいた子ども達。しかし捕まえたことで満足し、世話をしようとする姿が長続きせず、死んでしまうことが続いていた。振り返りの会でどうしたら良かったか話し合う機会を設けると、「飼うためにはどんなものが必要か、何を食べるのか、図鑑やタブレットで飼い方を調べた方がいい」「世話ができないなら園庭に返したほうがいい」などの意見が出た。その後は何度か失敗しながらも図鑑やタブレットで飼い方を調べたり、しばらく観察したら園庭に返したりする姿が見られるようになった。飼育物を通して生命の大切さに気付くきっかけになったようであった。 | |
| 36 | 県西 | 年長 | 環境 | うさぎの死 | 夏休み前まで水や餌をあげるなど、年長児が世話をしていたうさぎが死んでしまった。そのことを夏休み明けにクラスの子どもたちに伝えると、みんな大変残念がっている様子が見られた。「どうして死んじゃったの？」と聞いてくる子がいて、「暑さに耐えられなかったのかもね」と伝えた。幼稚園にウサギのお墓を作ったので、クラスのみんなでお墓に行き、手を合わせた。「前に死んじゃったうさぎと元気に遊んでいるとよいね」と子どもたちの声が聞かれた。このウサギの死を通して、暑さなどで死んでしまうことを知ったり、いなくなってしまったことの悲しさを感じたりしていた。 | |

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 37 | 県西 | 年少 | 環境 | 「カブトムシの赤ちゃんが生まれた」 | 春先からカブトムシの幼虫を各クラスで育て始めた。夏になり、成虫になったカブトムシと親しみ、見たり触れたり毎日餌をあげることを喜んでいた。夏休み後、卵を産んで死んでしまったカブトムシのお墓を作り、とても残念がる子どもたちの姿がみられた。土を少しずつ入れ替えて卵を大切に育て、１０月に飼育ケースを開けて幼虫を確認すると、７匹の幼虫が元気に育っていた。「赤ちゃんが生まれてる！」ととても喜び、糞を取り除いたり土を足したりして世話をしながら日に日に大きくなる幼虫を可愛がり、命のつながりを感じると共に、また夏に成虫になることを楽しみにしている様子が見られた。 | |
| 38 | 県西 | 年中 | 環境 | 「カニを還す」 | クラスで飼育していたカニが死んでしまった。全員で用水路へ行って捕まえ、餌を調べたり家から持ち寄ったりして一生懸命育てていたカニだった。カニの様子を特に気にかけていたA児とB児はどこに還すべきか真剣に話し合い、川と土とで意見が割れた。「川の生き物だから川に還した方が良い」と言うA児と「土の方が静かに眠れる」と言うB児の話し合いの末、A児が自分の気持ちに折り合いをつけて土に還すことに決まった。カニの気持ちを考えたり、友達の考えを受け入れたりする機会となった。 | |
| 39 | 県西 | 年長 | 環境 | カマキリの孵化 | 飼育箱を覗いたAが驚きながら「カマキリが生まれている」と伝えた12月の某日。B「カマキリって何百匹も生まれるんだよ」C「何を食べるか調べよう」と図鑑を見る。アブラムシを食べることが分かると、D「何百匹もアブラムシ捕れないんじゃない？」A「カマキリの気持ちになったらかわいそう…箱の中で狭いしご飯食べらないから逃がそうよ」F「逃がしたら他の虫に食べられちゃうよ」等考えを伝え合う。カマキリのためにはどうすることが一番良いか様々な考えを出し合い、最終的には「箱の中で死んでしまうより逃がして、大きくなったらまた会えたら嬉しいんじゃない？会えるのを待っていよう」というAの意見に賛同し逃がすことになった。草の生えている空き地に行き、一匹ずつ潰さないようそっと逃がし「大きくなったらまた会おうね。いっぱい食べて元気に育ってね」と惜しみながらも成長に期待をもちお別れする姿が見られた。 | |

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 40 | 県西 | 幼複合 | 環境 | オオカマキリ「きょうちゃん」との出会いから別れまで。 | 9月に園庭でカマキリに出会う。「飼ってみたい！」という思いから図鑑を使い生態を調べていった。「高いところが好きだから、木を入れたらいいかも」「バッタとコオロギを食べるって書いてある」などと意見を出し合いカマキリに適した環境作りを始める。“きょうちゃん”と名前をつけながら、毎日愛着をもって育てることを楽しんでいた。10月半ば「なんかお腹が大きく見える」「ご飯を全然食べていない」と心配の声が…。図鑑に載っていた産卵前の姿と見比べてみると見た目や様子が一致し「赤ちゃんがいるのかも！」と期待が膨らむ。10月下旬、飼育ケースを見てみると…なんと卵が産まれていた。「ふわふわしたものがくっついてるよ！」「本当に赤ちゃんがいたんだね！」と嬉しさと驚きでいっぱいの子どもたちだった。12月上旬「カマキリって冬眠するのかな？」という年長児のつぶやきからタブレットを使い調べると「カマキリは冬には死んでしまう」という事実を知り、「絶対にきょうちゃんは死なせない！」と強い思いをもって弱っているきょうちゃんを生き延びさせる方法を子どもたちなりに考え試す様子が見られた。12月下旬、きょうちゃんが亡くなっていることに気付く。「エサがなかったからかな…寒かったからかな…」ともう１度原因を調べていくと、「卵を産むと体力がなくなり死んでしまう」ことを知り「頑張って卵を産んでくれたから死んじゃったのかな。今まで本当にありがとう」ときょうちゃんの死を悲しみ涙を流しながら感謝の思いを口にする姿があった。全員でお墓を作り長期に渡っての飼育活動が終了した。今でもきょうちゃんのことを忘れずお墓参りを続ける子どもたちである。カマキリの飼育を通して命の大切さを学ぶことができた。 | |
| 41 | 県西 | 年少 | 環境 | うさぎの世話をとおして | ４月入園進級の３歳児が泣いて登園していた頃、うさぎの存在が不安な気持ちを癒してくれ、保育者が世話をする様子をそばで見てきた。始めは「かわいい」「触りたい」「餌をあげたい」という気持ちから一緒に世話をしていたが、次第に親しみをもち、うさぎを名前で呼ぶようになった。自宅から餌をもってきたり、園庭に行くと「餌が空っぽだよ」「ご飯あげる」と言い自分たちで餌の置いてある場所から持ってきて世話をしたりするようになった。世話をする際も、しゃがみ、餌をあげたりうさぎを撫でたり自然と大切に思う姿が見られるようになった。 | 特になし |
| 42 | 県西 | 年長 | 環境 | バッタを餌にする？それとも育てる？ | 園庭で大きなバッタを捕まえた子がいた。飼っているカマキリの餌にするか、それとも育てるかで子どもたちの意見が分かれた。「餌を食べないとカマキリが死んじゃうよ」「でもバッタが可愛そうだよ」などと、一人ひとりの子が真剣に自分の思いを伝え合う姿があった。それぞれの子の思いに寄り添い、二匹とも大事な命であることも伝えながら皆で考えた。しばらくすると「“いただきます”をしてご飯を食べるじゃん！だからバッタに“ありがとう”をするといいんだよ」という意見が出て、子どもたちの思いがまとまった。虫とのかかわりを通して、自分なりに命について考え、葛藤する場面となった。 | 特になし |

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 43 | 県西 | 年中 | 環境 | うさぎの飼育 | 11月になり、年長児よりうさぎの飼育当番を引き継いだ。意欲的に取り組もうとする子どもたちだったが、「うんちは臭いし汚いから掃除したくない！餌だけやる。」と言うＡ児。それを聞いたＢ児は、「ダメだよ、うんち間違えて食べちゃったら死んじゃう。私は掃除も頑張る。」と伝える。教師が「そうだね、うさぎさん、自分でお掃除できないから、みんなに手伝ってほしいんだって。お世話してあげられるかな？」と再度Ａ児に声を掛けると、「そうか、わかった！」と必要性に気づいていた。飼育物の命を守っていくために、自分たちができることについて考え合った。 | |
| 44 | 県西 | 年少 | 環境 | 球根植え | 「チューリップのおうちを作ろう」という投げ掛けに、アサガオを抜いた後の土のため、腐葉土を加えたり、柔らかいベッドにしようと土を掘り起こしたり、靴やズボンを土だらけにしながら取り組んでいた。<br>そうして作ったチューリップのおうちに球根を植え、アサガオの時のようにすぐ発芽すると予想するが、「まだ出てこない」「水をあげなくちゃ」今までの栽培活動で覚えたことを思い出し進んで関わる姿や、初冬の暖かさで次々に芽を出し始めたことに気づき、口々に「芽が出た」「おめでとうだね」と喜び小さな芽を見つめる姿に成長が感じられた。 | |
| 45 | 県西 | 幼複合 | 環境 | 五感を働かせた自然体験活動 | 箱根ビジターセンターの職員を講師に迎え、園庭の自然を活かした遊びについて学んだ。子ども達は五感を使って身近な自然を体験する活動を行った。事前に遊んでいたトイレットペーパーの芯で作った望遠鏡を手に、園庭を探検した。普段何気なく見たり触れたりしている草花を望遠鏡で覗く、鼻をあて匂いを嗅いでみる、耳をあて音を聞いてみるなど、今までとは違った視点での遊びに、子ども達は目を輝かせ、夢中になった。匂いを嗅いで「この花、甘い匂いがする！お菓子みたい。」と発見を言葉にして喜ぶ子ども、木にあてて音を聞き「一緒に遊ぼうって木が言ってるよ！」と嬉しそうに話す子どもなど、五感を働かせながら思い思いに自然と戯れる姿があった。自然とのふれあいを通し、身近な場所に多くの命があることを目の当たりにし、草花や生き物への関心かより高まる、貴重な機会となった。 | ビジターセンター職員を講師として迎えた。 |
| 46 | 県西 | 年長 | 環境 | オタマジャクシの成長 | 毎年、小学校の裏池にたくさんのおたまじゃくしがいるのを知っている子どもたち。今年もいるという話を聞き、みんな興味をもち行ってみることにした。池にはたくさんのオタマジャクシがいた。「捕まえたい」「飼いたい」という子どもたちの思いがあった。園に戻り捕まえるための道具を思い思いに作り、柄杓のように柄を長くしたり、罠を仕掛けようとしたりして、道具ができると嬉しそうに捕まえに行った。飼える分だけ園に持ち帰ってくると図鑑で餌を調べたり、観察したりしていた。家から餌を持ってきたり、飼育の仕方など子ども同士で話したりした。また、餌のあげ方はみんなで話し合う場を設け、おたまじゃくしを飼うための約束を決めた。少しの変化にも気づき、友達と共有して喜んでいる姿もあった。カエルになると「ちょっと狭そうで、かわいそう」と話す子がいたので、みんなで話し合い、いたところに戻すことになった。小さな命を大切にする気持ちが芽生えてきてきた。 | |

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 47 | 県西 | 幼複合 | 環境 | 続・トカゲのはっちゃん | 生き物が苦手な年長児であるが前年度の年長児の姿を見ていたので、園庭にトカゲが現れる時期になると少し怖い気持ちはあるが発見したことを保育者に伝え、繰り返し追いかける姿があった。自分達で捕まえたい気持ちに駆られ、保育者と一緒にメスのトカゲを捕まえることが出来た。捕まえた喜びから飼育することを決めたが、自分達の好きな活動に夢中になり、飼育することには気持ち向かなくなってしまった。夏を迎えるとトカゲが卵を10個産み、子ども達がもう一度世話をしようという気持ちになり、保育者と共に草や水を入れ替え、餌のミミズを捕まえ直射日光が当たらない所で飼育した。そのような過程を経て8匹のトカゲが飼育ケースの中を元気に動き回り、青く光る小さなトカゲを、「かわいい」と愛おしそうに眺める姿があった。小さなトカゲは上手く餌を食べることができないこと、今夏は猛暑続きで飼育ケースの中に熱がこもってしまったことで、9月の休日明けに7匹のトカゲが死んでしまった。子ども達に状況を話し、生き残ったお母さんトカゲと葉っぱの中に上手にくるまっていた1匹の赤ちゃんトカゲは、子ども達と話し合って園庭に逃がすことを決めた。飼育して卵を孵すという貴重な体験をしたと共に、飼育するには様々な条件が必要な事を学んだ。 | |
| 48 | 県西 | 年中 | 環境 | カブトムシ | 夏休み中の登園日。久しぶりに登園した子どもたちだったが、クラスで飼っていたカブトムシが死んでしまったことを知った。<br>カブトムシの寿命は、成虫になってから１～３か月。おそらく寿命を迎えたのだと思うが、動き出しそうなほど、ツヤがあって綺麗だった。<br>子どもたちは、カブトムシの死を受け入れられないようで、「たぶん、寝てるんじゃない？」「違うよ、死んじゃったんだよ。」「でも、夜になったら動き出すと思うよ。」「目は起きてるみたい。」と、カブトムシの様子をじっと観察していた。「やっぱり動いてないよ。死んでるから、埋めてあげよう。」<br>生き物を飼うということは、命の尊さにふれること。カブトムシから、子どもたちはいろいろなことを学ぶことができた。 | |
| 49 | 県西 | 年長 | 環境 | カナヘビの子 | 秋の終わりに、年長児が園庭でトカゲを見つけた。捕まえて図鑑で調べてみると、「ニホンカナヘビ」だった。お腹が黄色でしっぽが長く、おとなしく可愛いので園で飼うことになった。餌はコオロギと知り、みんなで探したがなかなか見つからない。クラスみんなで相談すると「可愛いから逃がしたくない。」「もっと触りたい。」「でも前に飼っていたヤモリは餌がなくて死んじゃったよね。」「えさがないのはかわいそうだね。」「やっぱり逃がそう。」みんなで考えて、カナヘビを逃がすという結論に至った。カナヘビとお別れをした後、「家族に会えたかな。」という言葉が聞かれ、命について考える良いきっかけになった。 | |